

## ORへの期待と願い

財団法人 国際科学振興財団専務理事 今村 和男



第1次オイル・ショックは20年も昔となり、今では知らない人も多い。当時、洗剤やトイレの紙が店頭から一時姿を消し、小さな社会不安を引き起こした。しかし何といたって大問題は、原油の輸入をいかに確保するかであった。

その頃わが国は、総エネルギーの70%を石油に頼り、その99.7%を輸入に依存していた。その90%は中東の石油であった。

中東産油国が中心であるオペックが、昭和の48年、西暦1973年の10月、一方的に原油価格の大幅引き上げと生産制限を発表し、わが国は大変なショックを受ける羽目となった。

このオイル・ショック全く寝耳に水であったのか。じつはそうではなかった。

1970年、オイル・ショックの3年前、当時の総合政策研究会理事長 土屋 清氏がウィーンのアベック本部を訪れた折、オベックは原油の値上げ、メジャーへの経営参加、資源保持のための生産制限を1970年代に行なうとの情報を得、帰国早々通産省へ報告書を提出された。しかし日本政府も関係業界もこの報告をとりあげようとはしなかった。

それからオイル・ショックの3ヵ月前、土屋氏は学会の夕食会で「エネルギー危機と日本」と題し危機の可能性と日本のとるべき政策について講演され、その内容は学会会報721号に詳しく紹介されている。

その会誌が発行された直後、オイル・ショックは起こったのであるから決して寝耳に水ではなかったといえよう。

わが国では特に起こってほしくないことはなるべく考えない、口にしない、むしろ口にすることはしないことすらある。起こったら起こった時に考える。

アジアのある国のこと。宗教色の強いこの国で、エイズのように忌まわしい病気はあってはならないしあってほしくはない。政治も行政も教育も手を打たずにいたところ、近年、エイズ感染が容易ならざる事態となっていることがわかり、大問題となった。手遅れともいえる。

あってほしくない、起こってほしくないことが起こらないのであれば、いうことはない。しかし起こる可能性がゼロでなければ、起こった場合のことを考え、できる手を考えなければならない。起こってから考えるのでは手遅れとなるかもしれない。起こる可能性の検討はもちろん大事であるが、起こってほしくないことには目をつぶる、この姿勢は徹底的に改める必要がある。

ORは、いかに悪者にされようとも、起こる可能性のある事態と、もしそれが起こった場合の影響と対策を真剣に考えてほしい、これが第1。

もう1つ、本当に気になることは、それは言葉についてである。

QOL、昨今よくお目にかかるが、Quality of Lifeの頭文字で作った言葉である。戦後、1940年代後半、提唱された言葉と聞くが、私が知ったのは1970年代の初頭、有名なRAND CorporationのDalkey氏らの研究報告による。HappinessとかWelfareについては昔から宗教家や哲学者による多くの研究があるが、科学の及ぶ限りの研究対象としては新しい言葉を造った方がよいと考え、Quality of Lifeという言葉を選んだとDalkey氏は述べている。したがってDalkey氏らのQOL研究は、HappinessとかWelfareの追求を目的とし

ている。

方法としては全く異なるが、わが国では三菱総合研究所の優れた報告があり、私もその研究をフォローさせていただいたことがある。

その頃は今から20年も前となるが、QOLを「生活の質」と理解し、それであまり不都合なことは起こらなかった。

1970年代に入り米国では、QOLという言葉が医療の世界にも浸透することとなった。有名なカレン事件、植物状態にあった若い女性の尊厳死の問題がこの動機の1つとなっているともいわれている。

医療の分野では、QOLを生活の質と訳すのは適切とは思えない。そこで色々の訳が考えられている。

その1つに、生命の質というのがある。

医療の現場では、生命の質の低い人の犠牲によって、生命の質の高い人を救うことは許されるかとの問題が生じた。事実、胎児の生命を犠牲にしその組織細胞の一部を利用して、アルツハイマー病を治す研究も行なわれているという。生命の質の大小判断には、自己主張能力と痛みを感じる感覚を基準としこの大小で生命の質の高い低いを判断するのだという。

生命という抽象概念の質を問題とし大小を論ずる、そんなことはわれわれにできるのか。

牛の生命の質は低いから食用に供することは許されるが鯨のそれは高いから許されない、といった海外の学者の講演を聞き、驚いたことがある。QOLを“生命の質”と解し自分なりの基準を用

い、あまり明らかでない判断法で生命の質が高いとか低いとかいうのは危険である。

QOLが、医療の分野の大事なキーワードの1つとなっている今日、QOLの概念、訳語、基準とそれによる判断はきわめて慎重な考察を必要とする。

国や民族はそれぞれの宗教、文化、伝統をもっている。わが国では昔は鯨は食べても、四つ足は食べなかった。また日本人でも1人1人生き方を異にする、人生観、価値観が違うのである。

QOLを統一した概念、基準、判断法で考えることはできないし訳語も分野ごとに違ってもさしつかえない。

しかし、今日私の目に止まる限り、わが国ではQOLの概念や訳語などを明らかにせず、QOLを日本語にしないまま用いた報告が多すぎる。すなわち、“QOL”という言葉が一人歩きしている。

私がORに期待することは、言葉をいい加減に扱わないこと、特にQOLのような外来語には、はっきりした概念、基準、判断法や訳語をつけていただきたいのである。

私の財団でも遅まきながら昨年、民族の特質を研究する勉強会を始めたばかりで、言葉の研究は重要な要素としており、3ヵ月に一度くらい割合で東京で集まっている。大変広い範囲の方々に参加していただいております。楽しい勉強会なので興味関心がある方はご参加ください。

(連絡先 財団東京事務所 担当 理事 伊藤 等 または事務局員 岡井、杉、草野)